

気だるげ男子の いたわりご飯

水縞しま Shima Mizushima



アルファポリス文庫

1 たけのこと鶏肉の煮物

「はあ、疲れた……」

仕事で疲弊した体を引きずるようにして、私、清家杏せいけあんは古い駅舎の階段を一段ずつ上った。

疲労が蓄積した体はひどく重い。手すりを握る手にも力が入る。

「あと、もう少しで家に着く……」

線路をまたぐようにしてかけられた通路をふらふらと歩いた。

通路の端まで行くと、今度は階段を一段ずつ下りていく。駅の構造上、仕方がないとはいえこの上り下りは仕事終わりの体にこたえる。

若干、足元がおぼつかないのはエネルギー不足のせいだ。

昼食を食べる暇がなかった。一日のスケジュールを確認して、スタッフに仕事を割

り振って、会議をハシゴして。その合間に事務仕事を片付けた。

気づけば、昼休みの時間はとくに終わっていた。スタッフからお土産でもらったクッキーをミネラルウォーターで流し込みながら、「せてみてコーヒーが飲みたいなあ……」と、今から数時間前、夕方頃の私は思っていたのだ。

駅の改札を出ると、生ぬるい風を感じた。

肌が少し汗ばんで、髪が張り付いていることに気づき、手櫛で髪を整える。前髪が伸びてうっとうしい。最近美容院にも足が遠のいている。休日はつい、部屋でごろごろしてしまふのだ。

ため息をつき、後ろの髪と前髪をいっしょにして頭の上で束ねた。手首につけていたゴムを使って、ぐるっと巻き、簡易なお団子ヘアを完成させる。

そろそろ季節は夏の盛りになろうとしている。夏は唯一の閑散期だ。それなのに、こんなに忙しいなんて。

数ヶ月先の繁忙期のことを思うと、ドツと疲れが増した。

私が勤務しているのは、主に犬と猫のおやつをメインに製造しているペットフードメーカーだ。素材だけを使った「無添加の安心安全のおやつ」がウリである。

昨今のペットブームの影響もあるのか、小さな会社だけど、毎年順調に業績を伸ばしている。

こぢんまりとした会社ゆえ、何事にも対応できる社員が重宝される。

私はもともと事務職だったのだけど、商品の発送作業を手伝ったり、製造業務のヘルプにまわったり。要は都合の良い人材として扱われている。

そんな二十九歳の現在、自分の名刺には役職が付いている。

器用貧乏という、哀しい性^{さが}のおかげだと思う。

ぐるる、ぐう――！

お腹が鳴った。

ぎりぎりとはいえ二十代女子にしては、威勢の良過ぎる音だ。

私は任されている仕事の納期やアレコレをむりやり頭の中から追い出した。そうして、これから起こる幸せでおいしい時間のことに思いを馳^はせる。

今日は、待ちに待った金曜日。

一週間、仕事をがんばった自分へのご褒美がある日だ。

「おいしいごはんが、私の帰りを待ってる……！」

一人暮らしをしているマンションには、今頃おいしいごはんが用意されているはずなのだ。

大好きな煮物と、ほっこり沁みるお味噌汁と、あとは副菜が二品ほど。

すぐに食べられるように、お皿に盛ってテーブルに準備してくれている。食べたあとは後片付けをする必要もない。ささっとシャワーを浴びて、満腹のお腹をさすりながらぬくぬくのベッドで眠りにつく……

想像するだけで最高に幸せな気持ちになり、心なしか足取りが軽くなる。

いつも私にうれしいごはんを作ってくれるのは、西依にしよりさんという五十代半ばの女性だ。

彼女は「お料理代行サービス・きっちんすたっふ」のスタッフさんだ。

手際がよくていつも笑顔で、顔を合わせると「お疲れさま」とか「たくさん食べて栄養をとってね」とか、労わりの声をかけてくれる。

笑顔が標準装備すぎて、彼女の胸元にある名札の「ニシヨリ」という文字さえ、にっこりと笑っているような気がしてくるほどだ。

初めてこのサービスを利用したときから指名を続けている。

彼女は私にとって最高のスタッフさんだった。

西依さんに来てもらうのは週に一度。それが今日なのだ。

料理代行のサービスを利用するようになったのは、今から半年ほど前——繁忙期でへとへとになっていた頃だ。

その頃は忙しさを理由に自炊をサボり、コンビニ通いを続けていた。もともと料理が苦手だというのもある。

しかしコンビニとは不思議なもので、慣れてくると何を食べても味に飽きが来るようになった。

おにぎり、お弁当、パスタ、サラダ……

種類は違うし、味だって甘辛かったり、酸っぱかったり、しょっぱかったりするのだけど、なぜか頻繁に食べていると「味に飽きたな」と感じる。

外食に行っても似たような現象が起きる。

そして総じて味が濃い。私は基本的にあっさり味が好きだ。特にアレルギーはないし、食いしん坊なのでなんでもおいしくいただくけれど、好みでいうとあっさり派だ。堪えきれなくなった私は「あっさり ご飯 宅配」なんてワードで検索をかけ——

そして、「きっちんすたっふ」……西依さんに出会ったのだ。

西依さんは、長年、主婦として家族のために食事を提供してきたスキルをいかし、きっちんすたっふで働きはじめたという。

『いつも私みたいなおばちゃんを指名してくれてありがとうね。でも、遠慮せずに他のスタッフを指名していいのよ。洋食とか、イタリアンとか、あとはタイ料理とか、いろいろ得意なスタッフがいるからね』

いつだったか、そんな風に言っていた。西依さんは謙虚で素晴らしいひとだ。けど、洋食もイタリアンも、タイ料理だって、今は簡単に外食でお目にかかれる。

ほっこりする家庭料理のほうで難しいのだ。貴重で大切な私のスタッフさん。

利用するうちに、きっちんすたっふがすっかりした会社だということも分かった。予約時や利用前後のフォローも完璧だし、スタッフへの指導も怠らない。

それならばと、数ヶ月前から家の鍵を預けるために「預かり証」なるものを発行してもらった。

社内管理システムで、誰が鍵を持ち出しているのか、いま鍵がどこにあるか、常に監視しているのだとか。

おかげで、私は帰宅後すぐにごはんにありつける。

マンションに辿り着き、エントランスを足早に駆ける。死にそうなくらい体が重かったのが嘘みたいだ。はやく、はやく、と思いながらエレベーターの到着を待ち、うきうきしながら自分の階に着くのを待つ。

ダッシュで部屋の前に行って鍵を差し込む。

そして、勢いよくドアを開けた。

「西依さん、ただいま〜！ いつもありがとうございます！ ごはんできてます……か……」

いつも笑顔で迎えてくれるはずの彼女は、そこにいなかった。

代わりに、やたら見目麗しい青年が立っている。

私は勢いよくドアを閉め、部屋番号を確認する。

真正正銘、自分の部屋だった。そもそも間違っていたら鍵が開くはずない。

今度は、そおっとドアを開ける。

「え……？ だ、だれ……？」

自分の部屋に見知らぬ若者がいる事実、心臓がバクバクする。

もしかして、逃げたほうが良いのだろうか？ まさか、いま問題になっている闇バイトとか？

ごくり、と息を飲む。

部屋の中にいる青年は、無表情でたたずんでいる。

「……す」

え……？ なに、酔？

小さくて聞こえなかった。彼は、吐息のような「す」という一言を発し、首から下げた名札を私に見せてくる。

そこには、投げやりな文字で「ぐんじ」と書かれていた。

よく見ると、彼は見覚えのあるエプロンをしている。

濃いオレンジで、形はシンプルなエプロン。

胸元には白抜き文字で「お料理代行サービス・きつちんすたっふ」とある。

西依さんが、いつも身に纏^{まと}っていたエプロンだ。

「……郡司^{ぐんじ}祥生^{しょうせい}です」

ああ、なるほど。さっきの「す」は「酔」じゃなくて、「郡司」で「す」の「す」

かあ。まったく、最近の若い子は声が小さいから困る。

そんなことを思いながら、部屋に一步進み入る。

「きつちんすたっふの方だったんですね。もしかして研修中とかですか？ 西依さんに教えてもらうなら間違いないですよ。すっごくおいしいし、手際も良いし」

スタッフだと分かって、とりあえず安心する。

もしかしたら、この青年は西依さんの仕事ぶりを学ぶために来たのかもしれない。なにしろ彼女は、料理の腕前はもろろん気遣いだって一流なのだ。

とはいえ、肝心の西依さんの姿が見えないのが気になる……

「あ、えっと。郡司……さん？ いつも指名^{しちめい}させていたっている西依さんは……？」

再度、美青年に訊く。

彼は私から視線を逸らし、スマホを取り出した。片手で素早く操作して画面をこちらに向けてくる。

「ん？ なにに『指名^{しちめい}いただいたスタッフが急用のため、代わりのスタッフを手配いたします』……？」

画面の文字を読んでいく。

どうやら西依さんは家庭の事情で急遽お休みを取ったらしい。謝罪と共に、代わりのスタッフであれば派遣できる旨が説明されている。

「あなたが了承したから、俺はここに来たんですけど？」

美青年が冷やかな表情でこちらを見ている。

私は慌てて通勤バッグの中に手を入れた。大容量のバッグの中からスマホを探し当て、きっちんすたっふのアプリを確認する。

同じ文面の通知が、昼前に私のスマホにも届いていた。

「あっ……そういうえば、通知が来てて、いつもみたいに西依さんからの献立のお知らせだと思つて、よく確認せずにOKボタンを押しちゃったような……」

当日になると、アプリで献立を確認できるのだ。

通知が届いたのは、ちょうど会議をハシゴしている最中だった気がする。忙し過ぎてきちんと読んでいなかった。

美形スタッフの視線が、グサグサと刺さる。

「あ、あの。ちゃんとアプリの詳細を確認してなくて……、ごめんなさい」
とりあえず、素直に謝つておく。

それから恐る恐る顔を上げた。

「それで、西依さんは大丈夫なんですか？ なにか困ったことに……」

「個人情報なんです」

私の声を遮るように、無表情のまま美形スタッフ——もとい郡司が冷たく言い放つ。その言い方にカチンときた。このご時世、個人情報は大切だし、詳しい事情をいえないことも分かる。私はただの客なのだし。けど、もうちょっと言い方はないのだからか。

失礼な態度に反抗するように、私はじろじろと彼を見た。

おそらく二十歳そこそこだろう。

顔が小さすぎるのでよく分からなかったけど、改めて見るとかなり長身だ。細身で足が長い。着ているのは普通の白いTシャツと黒のパンツなのに、スタイルが鬼のようによいのでモデルのように似合っている。

ダルそうにしているくせに、ちよつとした所作が美しくて育ちが良さそうに見える。ツンツンした王子様のようなだ。

明るい色に染められた髪は、無造作に束ねられている。ほどけば肩あたりまである

のだろう。無造作な感じさえ計算されたスタイリングのように思える。おまけに髪はツヤツヤだし、若さゆえ肌はつるつるしている。

いや、私だってね？　ちよつと忙しくて手を抜いてるだけで、ちゃんと時間をかけてあげたら髪だってうるつやだし、肌だって……

「はあ……」

ちよつと悲しい気持ちになってきた。

なんとなく力が抜けて、ダイニングテーブルの席につく。

深く息を吸って、気が付いた。ふわんと鼻を突く出汁の香り。

「ん？　え、これって……」

目を見開いてテーブルの上を見直す。

テーブルの上には、ご馳走が並んでいた。

西依さんがいつもそうしてくれるように「今日の献立」と書かれた名刺サイズほどのメモが、ごはんのお皿の横、小さなスタンドに立てかけられている。

【今日の献立】

- ・ たけのこと鶏肉の煮物
- ・ かつお節とじゃこの和風ポテトサラダ
- ・ 小松菜と人参のゆず胡椒あ和え
- ・ ごはん
- ・ 具だくさん豚汁

ちよつと——！　献立が神なんだけど！　好きなものばかり。全部が私の好み。

「お、おいしそう……」

思わず声が漏れた。

「ま、まさか、これ作ったのって……」

おそるおそる、彼に向かって人差し指をさす。

「他に誰がいんの？」

あっさりと肯定された。

信じられない。こんな若い子が？　ぴっかぴかのイケメンが？　和食のど真ん中みたいなメニューを作ったの？

「嫌なら食べなくてもいいけど」

「食べます！　食べるに決まってるじゃない……！」

この瞬間のために、へとへとになっても仕事をがんばったのだ。待ちに待った、私の一週間のご褒美……！

ほかほかのごはんが盛られたお茶碗を彼から受け取り、私は「いただきますっ！」と手を合わせた。どれから食べようか迷う。

しばらく逡巡してから、まずはメインであるたけのこと鶏肉の煮物に箸をつけた。たけのこの食感が好きだ。噛み応えがあるのにかたすぎない。しゃきしゃきして、あっさりとした味わい。鶏もも肉のジューシーな旨味がたけのこにギュッとしみこんで、ほっこりした煮物に仕上がっている。

「ん〜、うまっ！」

鶏もも肉は大きめにカットされていて、満足感がある。彩りも兼ねてか、さやいん

げんが添えられているのだけど、ほのかな苦みがしょうゆと出汁に絡んでおいしい。

自然とごはんにも箸が伸びていた。つやつやで甘みを感じる白米を勢いよくかきこむ。

おいしいおかずとほかほかの白米を交互に頬張っていると、体の中に蓄積していた疲れとか悩みが消えていく気がする。

「しあわせ〜！」

単純だけど、お腹がいっぱいになると、それだけで幸せを感じるのだ。

副菜のゆず胡椒^あ和えは小松菜と人参がくったりしていて、味がよくしみこんでいる。小松菜にはわずかにシャキシャキ感が残っていてうれしい。ぴりりと辛いゆず胡椒に食欲をそそられ、副菜にもかかわらずごはんがもりもりと進む。

あつという間にお茶碗が空になってしまった。

「おかわり！」

お茶碗を郡司に差し出すと、冷やかな視線を投げられた。

「……そういうサービス、やってないんで」

「西依さんにおかわりって言うのと、すっごくうれしそうな顔になって、いっぱいごは

んを盛ってくれてただけどね〜」

ぜったいに聞こえているはずなのに、郡司は素知らぬ顔で洗い物をしている。私は仕方なく席を立て、炊飯器を開けた。

「わわ！ まだいっぱいごはんがある！」

どうやら二合ほど炊いてくれたらしい。

これで心置きなくおかわりができる。

ほくほくとした気持ちで白米をお茶碗についだ。

「きつちんすたっふさんって、すごくしつかりしてますよね」

私の好みが、代理スタッフである郡司にもしつかり伝わっていることに感動して、ついそんなことを言ってしまった。食いしん坊なので白米は念のため二合炊いておくど喜ぶ、という情報がきちんと伝達されているのだ。

「……どうも」

席に戻ると、一瞬だけ郡司と目が合った。

彼の愛想のなさはどうかと思う。けれど、悔しいけれど味はめちゃくちゃ満足だ。

席に戻ると、私はまだ手を付けていなかったサラダに箸を伸ばした。

和風ポテトサラダだ。

ポテトサラダの材料はとてもシンプルで、じゃがいもと玉ねぎ、それからかつお節とじゃこ。

じゃがいもはしっかりとつぶされてペースト状に近い。

新鮮でしゃっきりした水菜の上に、まるく形を整えられた和風ポテトサラダがこんもりと盛られていた。なめらかな舌触りと、さっぱりした玉ねぎの風味。

かつお節とじゃこのおかげで、立派な和食の副菜として成り立っている。

「こういうレシピってスタッフさんが考えてるんですか？」

ポテトサラダを豪快にもぐもぐしながら、イケメンスタッフに問う。

「……まあ」

「へえ〜！ すごくですね。これ、すごくおいしいですよ！ 全部おいしいけど、この和風ポテトサラダは初めて食べました。よく思いつきますね！」

表情筋はガチガチに固まってそうだけど、頭はやわらかいのかもしれない。若さゆえの柔軟さというか。

「……っす」

今度の「す」は、「ありがとうございま『す』」の「す」だろうな、と豚汁をすすりながら思った。

「んっ、この豚汁もおいしい——！」

献立のメモに「具たくさん」と書いてあったけど、本当に盛りたくさんな豚汁だ。

薄切りの豚バラ肉、大根、人参、油揚げ、こんにゃく、ごぼう、ねぎ、しいたけ……

贅沢すぎる。もうこれだけでおかずになりそうな勢いだ。それぞれの具材から旨味がしみだしている。それなのに雑多な味になっていない。出汁と味噌がじょうずに具材たちをくるんで、一杯の汁ものとして成立している。

「具材がたくさんのもううれしいけど、汁そのものがおいしい！ ごくごく永遠に飲める！ ラーメン鉢でもらいたいくらいだな——」

再び立ち上がって台所に向かう。

それから雪平鍋に入った豚汁のおかわりをしていると、隣に立つ郡司の視線に気づいた。

「なに？ ちゃんと自分でおかわりしてますよ。あ、それとも気が変わった？ 西依

さんみたいについでくれる感じ？」

「いや、そういうのはやらない。……すげえ食うなって思っ」

洗い物を終えたらしい郡司は、タオルで手を拭きながらこちらを凝視している。相変わらず無表情だけど、よく見るとほんのわずかなだけ感情をうかがい知ることができた。

どうやら驚いているらしい。

きつと私の食べっぷりに敗北感を感じているのだろう。ふふん。

私は火を止めてから、彼に向き直った。

「いつもこれくらい食べるのよ。ごはんは少なくとも二回はおかわりするし、そうすると汁物も同じくらい必要になるし」

「……ふうん」

郡司が、私のほうをちらりと見る。

彼の言いたいことは分かる。私の体型と食べっぷりがちぐはぐなのだろう。

私は女性にしては身長が高く、体重は平均値をかなり下回っている。つまりかなり痩^やせている。

黙っていれば儂^{はかな}げな外見と言われることもあるけど、実際のところはすばらで食いな女子なのだ。

そして、いまさら気づいたのだけど私の部屋は散らかっている。

今日の朝、勢いよく脱いで放り投げたパジャマが視界の端に映った。リビングのソファに、でろん、とだらしなく引つ掛かっている。色気のないキャラクター柄のパジャマの存在が気になって仕方がない。

西依さんにはとくにすばらな面がバレていたので、気を抜いていた。

まさか男子が部屋に来るなんて事態になるとは思っていなかったのだ。意識すると急に恥ずかしくなってくる。とにかくパジャマを片付けたくて仕方がない。

いてもたってもいられない感じだったけど、隣の郡司が落ち着き払っているので、影響されて徐々に私も冷静になってきた。

記念すべき部屋に訪れた男子第一号は、世にも美しい青年だった。

お料理代行サービスのスタッフだけ……

そこでふと言葉がこぼれた。

「見た目と違うっていうなら、郡司くんもでしょう。和食というよりは、イタリアン

とか得意そうだし」

「よく言われる」

否定しないんかい。

隣に立つと郡司が長身であることを再確認してしまう。

私も背が高いので、がつつり見下ろされることに慣れていない。

変に落ち着かない気持ちになりながら、私は少しでも遠慮がちに豚汁のおかわりをしたのだった。

おいしいものでお腹が満たされると、体中が喜ぶ。

体の隅々まで、じんわりと栄養がしみわたっていくような感じがする。

この感覚がとても好きだ。

郡司が帰ったあと、私は幸せな気分ベッドに入った。瞼を閉じたのと同時くらいに、スッと眠りにつく。

ぐっすり寝ていたはずだったのだけれど、気づいたら私は真っ暗闇の中で立ち尽くしていた。何も聞こえない。無音だ。

しばらくすると、目の前に小さな明かりが見えた。ぼんやりとした光だった。少しずつ鮮明になっていくそれは、小さな子どもの後ろ姿だった。

あ、これは夢だな、と思った。
ときどきみる夢なのだ。

不思議な体質だなと自分でも思うのだけど、私は疲れると同じ夢をみる。

だから、繁忙期や残業が続くと、そろそろだなと思う。

夢の中で、私は身動きがとれない。金縛りにあったみたいに、指一本動かすことはできない。

小さな子どもが、背伸びをしている。

キッチンに立っているのだ。つま先立ちでフライ返しを手をしていた。たどたどしい手つきで料理をしている。いっしょうけんめいに背伸びをする姿を見ると、なぜかいつも胸が苦しくなる。

手を貸してあげたい。

何か、言ってあげたい。

でも、動けない。言葉を発することができない。

私は苦しい気持ちを抱えたまま、幼い子の後ろ姿を見ていた。



月曜日は憂鬱になるひとが多いようだけど、私は意外と平気だ。

むしろ、めちやくちややる気がある。

土日にしっかりと休んで心身が元気なので「仕事よドンと来い！」とすがすがしい気持ちで月曜日を迎えている。

取引先には土日に営業しているところもあり、出社すると問い合わせのメールや発注などがわんさか来ている。

そういうメールは、多ければ多いほど良い。

さっそく、急を要するメールから順に返信をしていく。

キーボードを打ちながら、私は思わずにんまりした。このカタカタという音がたまらなく心地良い。タイピングをしたときに出る音……いわゆる打鍵音が大好きなのだ。お気に入りの音を見つめるために、いくつものキーボードを試し打ちした。家電量

販店に足を運び、理想のキーボードを探し求めた。

その結果、たどり着いたのが現在の相棒だ。私は自腹でキーボードを購入している。外国製のワイヤレスタイプ。薄ピンク色をしているので、見た目からしてかわいい。キーボードに指を下ろすと、妙に馴染む感じがして愛おしい。

私の場合は「カタカタ」というより、「カピカピ」のほうが正しいと思う。なんともいえない癒しの音だ。頭の中を音源でマッサージされている感じが、最高に気分を良くしてくれる。

私が残業を厭^{いと}わないのも、この打鍵音のおかげだ。仕事をすればするほど癒されていく。永遠に聞いていたいと思うくらい好きな音なので、自分の天職は事務職だと思っっている。

しかし、打鍵音というものは周囲のひとを不快にすることがあるそうだ。

私に言わせると、使用する側の人間とキーボードが合っていない。キーボードにも様々な種類がある。自分に合ったものを使うのがベストだ。

もしくは、キーボードを意味もなく乱暴に叩いているとか。

決して、荒々しく叩いてはいけない。そつと軽やかに打鍵すると良い。

そうすれば、心地よいカピカピ音が響く。

耳が癒される。まるで、清流のせせらぎのようだ。うつとりしながら仕事をしているので、ときどき「危ないヤツ」と言われることもあるけれど知ったことではない。

素晴らしい音に癒されながら、あつという間にメール返信を終える。

もう終わってしまった……と絶望感を覚える。

残念だけれど仕方がない。続いて、発注分の在庫を確認する。

在庫がなければ、製造してもらおうよう製造部に依頼する。

納期内に商品を発送できているか、急遽休んだスタッフの補填は大丈夫なのか。事務作業も溜めないようにしなくては。

そんなことを考えながら、勢いよく仕事をこなしていると、たいてい声がかかる。今日もそうだった。

「清家主任、すみませんっ！ お電話なんですけど、おねがいします。たぶん、ヨーキー？ って、おっしゃってるんですけど。ちょっと訛^{へま}りがあって聞き取れないんです」

女性事務スタッフの竹井^{たけい}嶺^{れい}衣奈^{いな}が困った顔でこちらを見ている。

ヨークーというのは、小型犬のヨークシャー・テリアのことだ。ブリーダーからの問い合わせだろうか、と思いながら電話に出ると、聞き慣れた声が耳に届いた。

「あ、清家さんかい？ 元気にしてるかねえ」

独特のイントネーションと、しゃがれた声。

長年お世話になっている猟師の男性だった。電話の内容は簡単な近況報告だけで、特にむずかしいことはなかった。

通話を終え、受話器を置いてから竹井さんに「ヨークーじゃなくて、リョーキだったよ」と伝える。

「りょーき……？」

メモとペンを片手にした彼女は、目をぱちくりさせている。

私の言葉に戸惑っているようだ。

私は頷いて、言葉を返す。

「そう、^{リョウキ}猟期。うち、鹿肉のジャーキーを製造してるでしよ。さっきの電話は猟師さんからで、猟期以外はなかなか鹿肉が手に入らないから卸したくても卸せないよ。どうしようもないねっていう、まあ世間話みたいなもの」

一年中、狩猟ができるわけではない。狩猟ができる期間は猟期と呼ばれる、秋から冬にかけての三ヶ月間だけなのだ。

「うちの会社も一気に仕入れをして冷凍保存しているんだけどね。それでも毎年、夏場になると在庫が少なくなるから。早く猟期にならないかなってお話。そういえば先々週あたりにも電話で話したっけ……」

世間話好きな猟師の顔を思い出して、私は苦笑いした。

「なるほど！ 勉強になります！」

そう言っただきく頷きながら、竹井さんはメモにペンを走らせ、ふと手を止めた。

「……猟期が冬なのは、なにか理由があるんですか？」

その質問に頷く。

「もちろん。誤射の危険性が低いからね」

冬は木から葉が落ち、草が枯れる。山野の見通しが良くなるのだ。また、農閑期のため里山で作業をする人の数が減るという事情もある。

「あとは、鳥獣の保護のためもあるの」

鳥獣の大部分は、春夏が繁殖期なのだ。

「そうなんです……！」

せっせとメモをとる竹井さんを、微笑ましい気持ちで眺める。

彼女は三ヶ月前、新卒で入社してきた社員だ。今のところ事務仕事を担当してもらっている。彼女の研修は私が受け持つことになった。素直でがんばり屋だし、順調に仕事を覚えて戦力になりつつある。

電話での受け答えが苦手なようで、初めは受話器を取る手が震えていた。

そういう場面を見てしまうと、つい「電話なんてぜんぶ私が取るから大丈夫！」とお節介気質を発揮しそうになるのだけど、ぐっとこらえた。

これは仕事なのだ。そんなことをしても彼女のためにはならない。指導係として心を鬼にした。

『私がそばにいるときは、竹井さんが電話に出てください。無理だと思ったら、すぐにかわるから』

そう言って励ますうち、少しずつ苦手意識がうすれていったらしい。受話器を取る手に怯えがなくなった。さっきだって元氣よくはきはきと電話に出ていたし、不安があればすぐに頼ってくれる。

なんの問題もない。彼女は、問題ない……

私は資料をめくる手を止めた。そして、じりじりと竹井さんとは逆の方向、右側を向く。

座っているのは、杉崎史哉すぎさきふみやという男性社員だ。竹井さんと同じく新卒で入社してきた。先月——六月から、私が彼に仕事を教えている。

なぜそんな中途半端な時期からなのかというと、杉崎くんにとって私が三人目の指導係からだ。

彼は最初に企画部に配属されたのだけど、そこでトラブルを起こして製造部に異動になった。

先輩社員の指導をことごとく無視したらしい。自分勝手に仕事を進めた結果、ミスが発生。

何度か同じようなことが続き、フォローにまわっていた先輩社員が匙さじを投げた、というのだそう。

そして異動先の製造部でも似たようなことがあり、私に役目がまわってきた。パソコンに向かう杉崎くんをそろりと眺める。

イマドキの子という感じだ。

すらっとして色白で、すっきりとした顔立ちの男子。ただ、私は彼が表情を崩したところをまだ見たことがない。スーツを着慣れていない雰囲気だけは初々しい新人という感じがして、見ていて微笑ましい。

ただ、と私はため息を吐いた。

そんな彼の問題は、大きく分けて三つある。

一つは、指導係の指示に返事をしないこと。指示内容を理解しているのか、こちらとしても判断ができない。

二つめは、他の社員との関わりを極端に避けていること。挨拶すらしないのだ。周囲と協力しながら進めていく業務もあるので、最低限のコミュニケーションは必要だと思う。

三つめは、他の部署でも問題になっていた点。指導を無視して勝手に仕事をしてしまうことだ。

ミスが起きないように先回りするにも限界がある。

匙を投げた先輩社員の気持ちだが、今さらながら分かる。

何か、良い指導方法はないものか……。ぎゅぎゅつと眉根を寄せながら、私は再び手元の資料に視線をやる。

それからおもむろに立ち上がった。

2 じゅわつと五目巾着煮

職場の喫煙スペースで、先輩社員の宮野実久がふうつと煙を吐いた。

「問題は三つあるって、杏は言うけどさ。結局はひとつなのよね……。私も、杉崎と離れて冷静になって、やっと分かったことなんだけど」

彼女は、私よりも四歳年上の先輩だ。私は煙草を吸わないのだけど、ヘビースモーカーである彼女を捕まえるには、この喫煙スペースで待ち構えているのが一番手っ取り早い。

いくつか確認事項がクリアになったあと、自然と杉崎くんの話題になった。

彼女は製造部の社員で、杉崎くんの二番目の指導係だったのだ。

「……問題はひとつ、ですか？」

「そう、結局はコミュニケーションなのよ。あの子、それが不得手なんでしょうね」
実久さんが慣れた手つきで、紙煙草の灰を灰皿に落とす。

私はそれを眺めつつ、三つあると思っていた問題点を思い浮かべた。
たしかに、実久さんの指摘する通りだ。

返事をしなかったり、挨拶をしなかったり、指導を無視したり……
どれもコミュニケーションが問題になっている。

思わずむむつと唸ると、実久さんは今度は煙草を吸わずにため息を吐いた。

「否に押し付ける形になって、本当に悪いと思ってる。でも、うんとともすんとも言わないんじゃない、製造のほうじゃ無理よ。そっちでも難しいとは思うけど……」

「今のところ、なんとかやれています」

「ほんと、助かるわ。ありがとうね」

「彼は、なんとというか自分と周囲との間に、壁を作っているような気がするんですよ……」

かなり強固な壁だと思う。

そう言うと、実久さんはカチカチッとライターを操作して、二本目の煙草に火をつけた。

「壁ねえ……。いわゆる陰キャってやつじゃないの？ 勉強が得意なんだし、きつとソレよ」

勉強が得意なのと陰キャはイコールではないと思うのだけど、彼女の主張も分からなくはない。

杉崎くんが入社してきたとき、ちょっとした話題になった。こぢんまりとしたわが社ではめずらしい高学歴なのだ。

大学名を聞くと、エリート、華やか、裕福そう、スマート……。なんとなく、そういうイメージが湧く。外見も悪くないタイプだったので、女子社員は色めき立っていたのも事実だ。

仕事の進め方と性格に難がありそう……。という話になってからは、すっかり人気は下火になってしまったのだけだ。

「問題が三つから一つになったので、実久さんに相談してよかったです」

やはり、自分だけで考えるのはよくない。周囲とコミュニケーションをとるのは大

事だ。相談したり、誰かに話すことで解決策が浮かんだりする。

私が微笑むと、ふうっと煙を吐きながら、実久さんが肩をすくめる。

「相変わらず、杏は前向きだね」

「何事も、考え方次第ですから」

これはいわゆる、座右の銘というやつ。ことあるごとに「考え方次第だな！」と思うようにしている。

「彼には、こまめに声掛けするようにします。話すことが苦手かもしれないけど、まったく会話なしで業務を進めることは不可能だと思うので。それも込みで仕事なんだよっていうことを、少しずつでも伝えていこうと思います」

「途中で投げ出した私がいうのは違うかもしれないけど、よろしく頼むわ」

片手でゴメン、という仕草をしながら、実久さんが頭を下げる。

私は微笑んで首を横に振った。

実久さんには、仕事を教えてもらった恩がある。それに新人社員を指導するのも、一応とはいえ肩書きのある自分の職務だと思うので、だったら良い方向に進むようにがんばるだけだ。

それからは、実久さんに宣言した通り意識して杉崎くんに声を掛けるようにした。

まずは朝の挨拶から。今までは事務所の全員に向かって「おはようございます」と

挨拶をしていたのだけど、個別に声を掛けるようにした。

まずは、左隣のデスクにいる竹井さんに。

「竹井さん、おはよう」

「おはようございます、主任！」

竹井さんがぺこりと頭を下げながら笑顔を見せる。

続いて、右側にいる杉崎くんに向かって。

「おはよう、杉崎くん」

「……………」

パソコンの画面に向かったままで、彼からは反応がない。

一瞬、胸がどきりとする。

この至近距離で無視するのは、なかなかメンタルが強い。普通の人間は、名前を呼ばれると嫌でも反応してしまうものだ。

「杉崎くん？」

私はもう一度、彼に声を掛けた。今度も聞こえないふりをするのだろうか。どういう反応をするのか、少しうきうきしながら様子をうかがっていると、杉崎くんがマウスを操作する手を止めた。

「……よ……、ざいます」

少しだけ、会釈するような仕草をみせる。

「うん、おはよう」

私は満足して、にこにこしながら着席した。

その瞬間、張りつめていた空気が和らいだ気がした。

私と杉崎くんのやり取りを、他の社員がひそかに注視していたのは分かっていった。そりゃあ、問題があると噂される社員の動向は気になるものだ。

竹井さんも安心したように、ほっと小さく息を吐いている。

お昼も、夕方も——挨拶以外でも、こまめに杉崎くんに声を掛け続けた。ただ、もちろんやりすぎてはいけないことも分かっている。

彼が忙しそうなお時は声を掛けない。なんとなく余裕がありそうだな、と思う時に声を掛けるようにした。

「進んでる？」

「……はい」

「分らないところ、ある？」

「……今のところ、ないです」

「できたら送信する前に見せてね」

「……はい」

すると、ぼそぼそとだが、返事をしてくれるようになった。

たまたま事務所にいた実久さんには、あとで「私には何を言ってるか、ぜんぜん聞き取れなかったんだけど？」と、やたら耳の良いひと扱いされた。

——実は、私が指導を受け持つてすぐの頃に杉崎くんはミスをしている。勝手に仕事を進めた結果という、彼にとってはお馴染みのミスだった。誤った商品価格を取引先にメールしてしまったのだ。

改定前の価格がデータ上に残っており、それを見て見積書を作成したらしい。すぐに気づいたので、大事にはならなかったのだけだ。

そのことを彼に指摘したとき、すごく悔しそうなお顔をされた。自分が間違ったことが

信じられない、というような表情だった。

その顔を見たときに分かった。

彼は、ものすごくプライドが高い。

自分の間違いを許せないのだ。指導係にきちんと確認をすれば済む話なのだけど、それもプライドが邪魔をするのだろう。

もしかしたら杉崎くんにとって、ここは理想の職場ではなかったのかもしれない。こぢんまりとした会社だし、彼の学歴ならもつと有名な企業に就職していてもおかしくない。この会社をちょっと下に見ているから、そこで働いている人間には頼る気がおきないのかも。

なんとなく、そんな風に思った。

とはいえ、彼は新入社員なのだし、ある程度成長するまではこちらを頼ってほしい。ふいに、一人目に彼を指導していた社員の言葉を思い出した。

『アイツ、問題はありまくりだけどさ。基本は有能なんだよ。一度説明したらすぐに理解するし、処理は速いし』

実際に杉崎くんの指導係になって、その言葉通りだと思った。

彼はとても能力のあるひとだ。ちょっと難ありな部分があるのは確かだけど、方向性を変えるだけで事足りる。難儀な新入社員を任されて「可哀想……」と、私は周囲から同情されているけど、そんなことはない。

考え方次第なのだ。

指導がうまく行けば、彼はめっちゃ仕事ができる部下になる。「可哀想」どころか、むしろ私はめっちゃツイてる！ 将来有望な金の卵をゲットしたも同然なのだ！

ぜったいに彼を有能で頼りになる部下に変身させる。私は密かに「部下有能化計画」というのを推し進めている。いずれは、私が抱えている大量の仕事を彼らに任せ算段なのだ。びしびし鍛えて、どしどし仕事を振る。

そうすれば、自分の仕事量が減る。連日残業の日々から脱却できるのだ！



そんな奮闘を続けていたら、あつという間に金曜日になった。

私の「部下有能化計画」を聞いた郡司が、テーブルの上に小鉢を置きながら、ぼろりとつぶやく。

「なんか、腹黒だな……」

今日も郡司は、嫌みっつらしいほどにぴかぴかで、きらきらしている。ゆるっとしたTシャツとシンプルなパンツスタイルなのに、どこの王子様だろう、と錯覚するほど様になっているのだ。

「腹黒とか心外なんだけど。せめて策士とかにしてくれない？」

残念ながら、今日も癒しスマイルの西依さんはお休みで、代わりにこの無愛想王子がうちにやってきた。

私はテーブルについて、郡司が整えてくれるごはんを眺めながら言った。

「評価が低いのは本人も本意だろうし、会社のためにもデキる社員になったほうがいいのは当然だしね。指導するといっても、やさしく！ を心掛けてるよ、ちゃんと」

どうだか、と首をかしげながら、郡司がほかほかごはんのお茶碗を渡してくる。

「でもさ——！ やっぱ疲れるよね。本当は、あんまりひとに教えたりするの得意

じゃないし」

おそろく私は、ひとりで猪突猛進に、ドドドドッと仕事を進めていくほうが性にあっている。脇目も振らずというか。むしろ振りたいくないというか。

汁ものをテーブルに置く郡司に、視線で「もう食べていい？」と急かす。ちなみに、今回の献立は以下のとおり。

【今日の献立】

- ・じゅわつと五目巾着煮
- ・ほうれん草のピーナッツ和え^あ
- ・なすの甘酢だれ
- ・ごはん
- ・トマトのふわふわ卵の味噌汁

「はい、召し上がれ」

許可が出たので、私は、ぱんっと手を合わせてお箸を取る。

「いただきます！す！」

まずは、なすの副菜をいただく。

照りっ照りの見た目だ。甘酢だれが、なすにとろつとよく絡んでおいしい。ちよつと濃いめの味付けなので、ごはんがもりもり進む。

野菜とは思えないほどジューシーだし、なすの形がほとんど崩れていない。もしかしたら、たれと絡める前に一度、油で揚げているのかもしれない。

「素揚げ？」

もぐもぐしながら郡司に問う。

「いや、片栗粉つけてる」

なるほど、それで甘酢だれがよく絡むのか。

さくさくとろろり。めちやくちやおいしい。

ごはんにはマッチし過ぎて、副菜一品で早くもごはんをおかわりしてしまった。

続いて、ほうれん草のピーナツ^あ和え。

ピーナツがたっぷり入っている。こまかくすり潰した分と、粗めに残っている

ピーナツが風味と食感を楽しませてくれる。

「わざわざ二回に分けて、すり潰した感じ？」

「……まあ」

面倒くさそうにしながらも、郡司は返事をくれる。

勢いよくごはんを頬張りながら、テーブルの端に置かれた献立のメモをちらりと見る。トマトのふわふわ卵の味噌汁、のころをまじまじと見た。

トマトの味噌汁なんて、初めての体験だ。

味が気になる。

どきどきしながらすすると、メモの通り、卵はふんわりしていた。きめ細かい卵の舌触りと、まろやかな味噌の風味。やはり、あったかい汁物はほっとする。

そして、肝心のトマトと味噌の組み合わせは意外にも合っていた。トマトの酸味と味噌に溶けだした出汁の旨味がおいしくて、ほっこりする。

そして、いよいよメイン。五目巾着煮にそつと箸を伸ばした。

見た目にもふっくらした揚げにかぶりつくと、やさしい出汁の旨味がじゅわじゅわとあふれだした。中には、鶏ミンチ、枝豆、みじん切りされた人參としいたけがたっぷり詰め込まれている。

彩り豊かな具材がうれしい。やさしい味なのにごはんが欲しくなる。もりもりと食べながら、意外に彼は細かい仕事が好きなのかなと思った。

具材のタネを作って、油揚げに詰めて、ことこと煮る。五目巾着煮は手間のかかる料理だ。

そういえば、ピーナッツにもひと手間を加えていた。

顔を上げると、郡司はお皿を洗いにシンクへと立っていた。

じっと見ていると、視線が合う。

「なに？」

「こまごました料理が好きなのかなと思って」

「別に」

「じゃあ、なんで今日のメインは五目巾着煮なの？」

口の中に詰め込み過ぎて、もごもと言いながら彼に問う。

「いなり寿司が好きって書いてあったから、油揚げを使った」

ダルそうに視線を外しながら、郡司が答えた。

「いなり寿司？」

なんの話だろう、と思いながら自分の記憶をたどる。

「あ、好みの欄！」

そういえば、きっちんすたつに登録する際に、アレルギーの有無や好みを伝える箇所があった。

私はまず、アレルギーは無し、と入力した。そして、そのときたまたま食べたかったいなり寿司を好みの欄に入れておいたのだ。

「郡司くん、真面目だね！」

もぐもぐしながら言うと、特にうれしそうにすることもなく、郡司は頷いた。

顧客の好みに合わせて献立を考えるなんて、すごい。

腕は良いし、西依さんといい、きっちんすたつは良いスタッフさんを抱えている。私のおいしいごはんを堪能しながらそんなことを思った。

彼を見送ったあと、私は鼻歌まじりに入浴の準備をした。いつもはシャワーでサ

サツと済ませるのだけど、今日は金曜日。休日前の夜……!

夜更かしをしても問題ないので、久しぶりに湯舟に湯をためた。

ちよつと値段の張るバスボムを湯の中に投入して、贅沢な入浴タイムを満喫する。

「普段、がんばってるんだし。これくらいの贅沢は許されるよね……」

バスボムは、しゅわしゅわと音を立てながらあつという間に小さくなっていく。なんと良い柑橘の香りが浴室内に充満する。目を閉じながら、「はあ……」と体中の力を抜いた。

……何事も、考え方次第。

この座右の銘は、なかなか気に入っている。

どんなときでも、前向きになれる気がする。

同時に、「がんばること」も大好きだ。

暑苦しいヤツだと指摘されることもあるけど、「がんばること」で道が開けることもある。

ダメだったことも、あるけど……

あれは、一年ほど前のこと。「主任」という肩書がついて間もない頃だった。

午後、いつものように自分のデスクで仕事をしていたら、社長に呼ばれた。

社長室は事務所の奥にある。ノックして部屋に入ると、ソファに座るよう促された。

少しだけ緊張しながら、私はソファに腰を下ろした。向かいには、織部社長が座っている。社長は五十代の独身男性で、最近は仕事よりも趣味に精を出している。登山が趣味なのだ。

社員から「最近、社長の顔を見ないな」と声が上がるほど、滅多に出社しない。それでも会社は上手く回っているの、問題は無いのだろう。

そんな社長が、めずらしく出社している。

おそらくそれには、社長の隣に座っている人物が関係している、と私は直感した。

織部慧。

社長の甥だ。

半年ほど前に中途採用され、入社した。これまで、私は特に彼と関わりがなかった。配属された部署が違っていたし、業務上で接点があったわけでもない。

それなのに、なぜ自分が呼ばれたのだろう……?